た。「日月」姓のルーツは特定できたものの，「なぜ」について多くの仮説が考えられた。それらの裏付けを得るのは困難だった。最終的には，仮説を証明する証拠が少なっかったため，それぞれの説について想像を膨らませたほうが良いと判断して，論を進めた。最も分からなかったものの大切だと思うことは，先祖たちが生きた時代の思想，あるいは彼らが日頃何を考えて過ごしていたのか，ということである。名前の数だけ面白い由緒がある。誰しも，何世代もの多くの先祖がいたからこそ，現在の自分がいる。このように考えるうちに，不思議な気分になった。

山間地における地域商業と生活支援システムづくり
——島根県川本町を事例に——

福　間　みゆき

中山間地は，ますます生活しににくい環境になっている。人口の減少，高齢化，それらに伴う商店の減少である。中山間地の地域商業は弱体化している。商店が減ったため，住民にとって“最寄り”の商店はだんだん遠くなり，生活の不便を感じる人は少なくない。現状として，行政（自治体）側は商業，とりわけ小売業の支援に消極的である。また，地元の商工会は，商店主にやる気を出させることや，商店主全体をまとめることに苦労している。商店主どうしの意志疎通が図られておらず，まとまりに欠けるため，新しい取り組みを実現するのは，たいへん難しい状況にある。しかし，生活者の利便を確保するために，地域商業の強化は欠かせない。地域の活性化のためにも，地域商業の力が必要である。地元商店ならでの小回りの利くサービスにより生活利便性を確保し，また，行政・商工会・商店主が連携を深めながら，将来的に生活支援システムを運営できるような商業基盤を作らなければならないと考える。

磯部温泉の成立と展開
——別荘地から温泉地へ——

三　村　さおり

群馬県安中市にあるひなびた温泉地，磯部温泉は，明治期に別荘地として一時的ではあるが，その発展をみた。現在の磯部温泉の姿は，私たちが「別荘地」としてイメージする地域と比べ，意外性を感じさせる。先発の別荘地であった磯部温泉が別荘地ではなくなり，山ひとつ隔てた軽井沢が後発ながら，別荘地の代表格となったのである。本研究では，このような歴史的事実が，近代という時代背景において，どのような意味を持っているのかを，当時の史料をもとに明らかにした。まず，近代の別荘地は，西洋との接触のなかで希求された，夢を実現する空間だった。別荘地は，当時のリゾートとして中心的な存在だった。次に，磯部温泉が別荘地として成立，発展した背景は，明治18年の信越線（高崎～横川）開通し，東京からのアクセスが便利になったこと，明治17年の東京～高崎の鉄道開通で，群馬県の位置がリゾート地として適当と考えられたこと，磯部温泉の開拓者が西洋医学に基づく温泉効能を宣伝したこと，などである。また，磯部温泉と軽井沢の関係は，位置的には近いものの，それぞれに時代の影響を受けながら，地域の特性にあわせ発展したと結論づけた。